

「-方」表現の形成について

著者名(日)	長谷部 郁子, 神谷 昇
雑誌名	Scientific approaches to language
巻	9
ページ	25-47
発行年	2010-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000654/

「-方」表現の形成について*

長谷部 郁子^{a)}・神谷 昇^{b)}

a) 学習院女子高等科・筑波大学 b) 神田外語大学

本稿では、「走り方」や「愛され方」のような動詞の連用形が接辞「-方」により名詞化された表現（「方」表現）を語彙意味論と統語論の観点から議論する。具体的には、「-方」表現には「-方」の補部動詞の種類によって「様態」と「程度」の2つの解釈が生じることを概観し、こうした解釈の違いを説明するために「-方」が付加する動詞の語彙概念構造(LCS)にはACT ONやCONTROL、CAUSEのような上位事象が含まれていなければならないと提案する。また、統語構造において「-方」はNPの主要部Nでありそれが $v^{(*)}P$ を補部に取り構造を持ち、 v^* が外項を持つ場合には「方」が v^* と関連付けられて様態の解釈が生じる一方、 v が外項を持たない場合にはそれが不活性となるためVと関連付けられて程度の解釈が生じると主張する。最後に、このように、LCSと統語構造を検討することにより「-方」表現に説明を与えることは影山（1993）で提案されている「モジュール形態論」の枠組みを支持すると示唆する。

1. はじめに

本稿で取り扱うのは(1)に例示する動詞の連用形が接辞「-方」により名詞化された表現であり、伊藤・杉岡（2002）では、このような表現は生産性が高いことが指摘されている。

- (1) a. 様態：走り方、食べ方、考え方、作り方、壊し方、死に方、（雨の）降り方

* 本稿は、2009年10月25日に学習院女子大学で開催された第10回日本語文法学会における口頭発表の原稿に加筆・修正をしたものである。貴重なコメントを頂いた参加者の方々、特に多くの有益なコメントを下された佐野まさき先生には厚く御礼申し上げる。また、日本語文法学会での研究発表を準備するにあたり、島村礼子先生と伊藤たかね先生から有益なコメントをいただいた。言うまでもなく、本稿の誤りは全て筆者の責任である。

- b. 程度：愛され方、壊され方、壊れ方、溶け方、破れ方
- c. *思ひ方、*凍り方、*着き方、*住み方、*似方

「-方」は、多くの場合、(1a)に示されるように「走る」のような活動動詞や「壊す」のような達成動詞、「死ぬ」のような一部の到達動詞などの連用形に付加され、これらの動詞が表す動作などの様態を表す。また、(1b)のように、「愛される」のような動詞の受け身の連用形や「壊れる」のような到達動詞に付加し、「どの程度壊れているか」のような程度の意味を表すこともある。この名詞化接辞は、(1c)に示されるように、「住む」のような状態動詞や、「着く」のような到達動詞には付加できない。本稿は「-方」表現のこのような性質に着目し、語彙意味論と統語論の観点から分析を提示する。具体的には、「-方」が付加する動詞の語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure; LCS)には ACT ON や CONTROL、CAUSE のような上位事象が含まれていなければならないと提案する。また、統語構造において「-方」は NP の主要部 N でありそれが $v^{(*)}P$ を補部を取る構造を持ち、 v^* が外項を持つ場合には「方」が v^* と関連付けられて様態の解釈が生じる一方、 v が外項を持たない場合にはそれが不活性となるため V と関連付けられて程度の解釈が生じると主張する。最後に、このように、LCS と統語構造を考えることにより「-方」表現に説明を与えることは影山(1993)で提案されている「モジュール形態論」の枠組みを支持すると示唆する。

本論の構成は以下のとおりである。2 節では「-方」表現について概観し、3 節でこの表現がどのように LCS のレベルにおいて形成されるかについて議論する。そして 3 節で提案した LCS 表示をふまえ、4 節では「-方」表現の統語構造を提案し、5 節では、このように「-方」表現の LCS 表示と統語構造の双方を検討することによりどのような理論的帰結が得られ

るかについて論じる。6節は本論のまとめである。

2. 「-方」表現の解釈と動詞のタイプについて

本節では、「-方」表現の持つ様態と程度の意味と、「方」がどのような動詞に付加したときにどちらの解釈が得られるのかを中心に検討する。

前節の(1)において、「-方」表現には「様態」と「程度」の2つの解釈が可能であることを指摘したが、2つの意味はどのように区別されるのであろうか。(2a)に示すように「様態」を表す「-方」表現は「荒々しい／乱暴な」のような形容詞による修飾が可能であり、(2b)に示すように「程度」を表すものには「ある程度の」のような表現による修飾が可能である。また、「ある程度の」は、「*ある程度の死に方」のように、様態を表すものとは共起できない（以上の「様態」と「程度」の判別方法については島村礼子氏の指摘による）。

- (2) a. 荒々しい走り方、乱暴な食べ方、荒々しい（雨の）
降り方
cf. *乱暴な壊れ方
b. ある程度の壊れ方、ある程度の破れ方、ある程度の
溶け方
cf. *ある程度の死に方、*ある程度の走り方

「-方」表現が様態と程度のどちらの意味になるかは、「-方」の補部に現われる動詞に左右される。「-方」表現に出現することができて、様態の意味を表す「走る」や「叩く」、「作る」や「降る」のような動詞は(3)に挙げられている。また、(4)はその実例である。

- (3) a. 活動動詞：走る、歩く、泳ぐ、笑う、考える（心的
活動）

- b. 接触動詞：叩く、触る、拭く、撫でる
 - c. 達成動詞：作る、壊す、食べる、開ける、閉める
 - d. 天候動詞：降る、?晴れる
 - e. 到達動詞：?植わる、?集まる、死ぬ
- (4) a. 彼の走り方は変わっている。
彼の笑い方は特徴的だ。
彼の考え方は正しい。
- b. 太鼓の叩き方を知らない。
テーブルの拭き方が雑だ。
猫が喜ぶ撫で方をした。
- c. ケーキの作り方がわからない。
彼の食べ方は汚い。
ドアの閉め方が悪かった。
- d. この雨の降り方は酷い。
雨だった昨日に比べ、今日の晴れ方はすごい。
- e. ろくな死に方をしない。

他方、「-方」表現に出現することができて、程度の意味を表す「壊れる」や「閉まる」のような動詞は(5a)に例示するとおりであり、実例は(6a)である。また、(5b)のように「愛される」のような動詞の受身形も「方」とともに現れると(6b)のように程度の意味を表す。

- (5) a. 到達動詞：壊れる、溶ける、破れる、開く、閉まる
b. 動詞の受身形：愛される、壊される、叱られる
- (6) a. この家の壊れ方はたいしたことではない。
暑いのでアイスの溶け方がひどい。
この紙の破れ方は酷い。
ドアの閉まり方が足りなかった。
- b. 皆からの彼の愛され方はただごとではない。
あの子の叱られ方は酷かった。

以上のような動詞に対して「-方」表現に出現することができない「思う」や「凍る」のような動詞は(7)である。これらの動詞は全て、(8)のように「方」表現に現われることができないが、中には、「人としての在り方」のように慣用的に使用できる例も見受けられる。本稿では、これらの慣用的な「在り方」の用法の場合、「在る」は状態動詞ではなく、一種の「活動動詞」としてとらえられると考える。たとえば、「人としての在り方」は「人間がどのように生きていくか」という活動に焦点をあてていると考えることができる（詳しくは本稿末の appendix を参照のこと）。

(7) a. 状態動詞：思う、住む、似る、そびえる、在る

(cf. 在り方)

b. 到達動詞：凍る、着く、植わる

(8) a. 机の上に鉛筆がある。

*鉛筆の在り方

(cf. 人としての在り方、学問の在り方)

b. *この池の凍り方はすごい。

*この荷物の着き方は酷い。

どのような到達動詞が「-方」表現に使用することができ、どのような到達動詞が使用できないかといった問題や、どのような到達動詞が様態の意味になり、どのような到達動詞が程度の意味となるかという問題については3節で改めて考察する。

先に進む前に、上で概観した「方」表現における様態と程度の解釈の区別は、たとえば、すでに竹沢（1991）で議論されている「ている」表現がもつ「進行」と「結果」という2つの解釈の区別と類似していることを指摘しておきたい。進行の解釈の「ている」表現に現われるのは、たとえば「走る」のような（外項を持つ）活動動詞である一方、結果の解釈の

「ている」表現に現われるのは、「壊れる」のような一部の到達動詞などであることが知られている（竹沢(1991)；この他の動詞については竹沢を参照のこと）。

- (9) a. 山田さんが走っている（進行）
b. コップが壊れている（結果）

（(9)は竹沢（1991）より）

この類似性については、4節で再び考察する。

さらに、「-方」表現の統語的な特徴について簡単に触れておきたい。接辞「-方」の補部には、(10)(= (1b))や(11)に示されるように、受動態や尊敬語が現われることができることから、「-方」の補部に出現する動詞は少なくとも $v^{(*)}P$ を投射すると考えられる。また、基体動詞の目的語は、(12)のように「を」格でなく「の」格で標示される。

- (10) 愛され方、壊され方 (= (1b))
(11) 先生のお話になり方 （伊藤・杉岡（2002:108））
(12) 本 {の/*を} 読み方

このような事実については、4節で「-方」表現の統語構造を検討する際に再び取り上げることとする。

次の3節では、本節で概観した事実に対して語彙意味論の観点から分析を提示する。

3. 「-方」表現の形成と LCS

本節では前節で概観した「-方」表現にみられる基体動詞の選択や意味の違いを LCS の観点から説明する。具体的には、前者については接辞「-方」の補部として選択される動詞の LCS には、ACT ON や CONTROL、CAUSE のような上位事象が含まれていなければならないと提案する。例えば、「壊す」、「作る」のような達成動詞の LCS は(13a, b)であり、これらの LCS

には必ず何らかの上位事象が含まる。また、「笑う」や「走る」のような活動動詞もしくは「考える」のような精神活動を表す動詞の LCS の多くは、(13c, d)のように上位事象のみ、もしくは上位事象と MOVE の組み合わせから成り立つ構造である。したがって、これらの動詞は、「-方」表現に生起することができる。他方、「着く」のような到達動詞や「住む」のような状態動詞の多くは、(13e, f)のように BECOME や BE AT のような下位事象のみから成る LCS を持ち、よって(14) (= (1c))のように「-方」と共起することはできない。

- (13) a. 達成動詞：壊す
 LCS : x CONTROL<manner> [y BECOME [y BE AT BROKEN]]
- b. 達成動詞：作る
 LCS : [x ACT<manner> (ON y)] CAUSE [y BECOME [y BE AT z]]
- c. 活動動詞：笑う
 LCS : [x ACT<manner> (ON y)]
- d. 活動動詞：走る
 LCS : [x ACT<manner> (ON y)] CAUSE [y MOVE]
- e. 到達動詞：着く、凍る
 LCS : [y BECOME [y BE AT STATE / z]]
- f. 状態動詞：住む、思う、そびえる、在る
 LCS : [y BE AT STATE / LOCATION]
- (14) *思い方、*凍り方、*着き方、*住み方、*似方 (= (1c))

ただし、「壊れる」などの到達動詞の LCS には影山(1996)で主張されているように CONTROL が含まれると考えられる。影山 (1996) によると、(15b)の自動詞「壊れる」の LCS は、反使役化と呼ばれる操作によって他動詞「壊す」の LCS 内の主語として実現される動作主 x が目的語として実現される対象物 y と同定されることによって形成される。

- (15) a. 他動詞：壊す

LCS : [x CONTROL <manner> [y BECOME [y BE AT BROKEN]]]

- b. 自動詞：壊れる

LCS : [x=y CONTROL <manner> [y BECOME [y BE AT BROKEN]]]

なお、本稿では、(16)に示すように、「死ぬ」や「降る」などの一部の到達動詞の LCS にも CONTROL が含まれると仮定する。このように自動詞でありながら CONTROL のような上位事象の LCS をもつ動詞の共通点のひとつとして、(17a)のように被害受身文に現われることができることがあげられる。(17b)のように、上位事象を LCS 内に含まない「着く」のような動詞は、この構文に現われることができない。¹

- (16) a. 死ぬ

LCS : [y CONTROL <manner> [y BECOME [y BE AT DEAD]]]

- b. (雨が) 降る

LCS : [y CONTROL <manner> [y MOVE]]

- (17) a. この大事な時に同僚に死なれて困った。

ひどい雨に降られて困った。

- b. *忙しい時に、大量の荷物に着かれて困った。

(15b)や(16)に例示する CONTROL を LCS に含む到達動詞は、(18) (= (1a, b))のように「方」表現に現われることが可能であ

¹ CONTROL の有無をさらに支持する例として語彙的使役形が挙げられる。具体的には LCS に CONTROL を持つ「死ぬ」「降る」は CONTROL と BECOME 以下の主語を異なった個体に変える（「異化」する）ことにより、それぞれ「死なす」「降らす」という語彙的使役形を形成することが可能である。（(i)の LCS を参照）。

- (i) a. 死ぬ

[y CONTROL [y BECOME [y BE AT DEAD]]]

- b. 死なす

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT DEAD]]]

一方、LCS に CONTROL を持たない「着く」は BECOME の主語と BE の主語を常に同定しなければならないため、「*着かす」のような語彙的使役形が不可能である。

る。

- (18) a. 死に方、(雨の) 降り方
b. 壊れ方、溶け方、破れ方 (= (1a, b))

また、影山 (1996) によると、自動詞「植わる」のような到達動詞の LCS 形成には、脱使役化と呼ばれる操作が関与している。例えば(19a)の「植える」「集める」のような他動詞の LCS では、CONTROL の主語は特定の指示対象を持つ動作主(x)であるが、(19b)のような自動詞ではそれが抑圧され、CONTROL の主語位置に特定の指示対象を持たない動作主を表すゼロ要素 (φ) が現われる。

- (19) a. 他動詞：植える、集める
LCS: [x CONTROL <manner> [y BECOME [y BE AT STATE]]]
b. 自動詞：植わる、集まる
LCS: [φ CONTROL <manner> [y BECOME [y BE AT STATE]]]

そして、(19b)には上位事象の CONTROL が含まれているので、(20)に示すように、「植わる」や「集まる」はこの表現に使用することができる。

- (20) a. ?樹の植わり方 (が変だ)
b. ?動物の集まり方 (を観察する)

次に「様態」と「程度」の意味がどのように生じるのかを議論する。具体的には、本稿では「-方」は LCS において上位事象の述語を修飾する様態<manner>を取り立て、多くの「-方」表現が様態を表すと主張する。たとえば「走る」の LCS は(21) (= (13d))であり、ACT の<manner>が取り立てられるので「走り方」は様態を表す。

- (21) 活動動詞：走る

LCS : [x ACT<manner> (ON y)] CAUSE [y MOVE]

- (22) (= (1a))のほかの例も同様である。

- (22) 様態：走り方、食べ方、考え方、作り方、壊し方、死に方、(雨の) 降り方 (= (1a))

また、受け身となった動詞や CONTROL を含む到達動詞の場合には、Grimshaw (1990) や影山 (1996) に従い、統語レベルで外項として実現される CONTROL の主語はそれぞれ (23b)や(24b)のように項構造(Argument Structure; AS)あるいは LCS で抑圧もしくは同定されていると仮定する。その上で、このような動詞の LCS においては、本来は動作主 x を叙述する上位事象と上位事象を修飾する<manner>が不活性であると主張する。したがって、このような動詞の場合、様態の意味ではなく LCS 内の程度の意味が取り立てられる。

- (23) a. 他動詞：壊す

LCS : [x CONTROL <manner> [y BECOME [y BE AT BROKEN]]]

- b. 受身形：壊される

AS : (x[^], (y))

- (24) a. 他動詞：壊す

LCS : [x CONTROL <manner> [y BECOME [y BE AT BROKEN]]]

- b. 自動詞：壊れる

LCS : [x=y CONTROL <manner> [y BECOME [y BE AT BROKEN]]]

(= (15))

なお、(23b)に示すように、受動化により項構造のレベルで外項の抑圧が起き、その結果、LCS レベルにおいて動作主 x の様態を表す<manner>は不活性となるが、CONTROL 自体は存在するので、「-方」表現に現われることは許される。

また、動作主が対象物と同定されてしまっている(24b)の場合と異なり、(25b) (= (19b))においては、特定の指示対象を失ってはいるが、動作主そのものはゼロ要素として CONTROL の主語として存在するので、動作主の様態を表す<manner>は抑圧されていない。

(25) a. 他動詞：植える、集める

LCS: [x CONTROL <manner> [y BECOME [y BE AT STATE]]]

b. 自動詞：植わる、集まる

LCS: [ϕ CONTROL <manner> [y BECOME [y BE AT STATE]]]

(= (19))

影山 (1996) で議論されているように、「壊れる」のような到達動詞は(26a)のように「勝手に」のような副詞と共に起るのに対し、「植わる」のような到達動詞は(26b)のように「難なく」のような副詞と共に起る。

(26) a. もろい壺が勝手に壊れた。

b. (私達が) 実験に使う薬が難なく集まった。

本論では、影山 (1996) に従い、(26a)の「勝手に」は状態変化の対象物であるつぼが状態変化に対してもっている責任性を表すと考える。つまり、(26a)では(24b)のように y が CONTROL の主語として機能していることを示している。それに対し、(26b)の「難なく」はゼロ要素として伏せられた動作主 (つまり「私達」) が薬を集めた様態を表し、(25b)の LCS の<manner>の部分に挿入されることになる。以上から、「植わり方」は CONTROL の<manner>を取り立て、様態を表すものと考えられる。

それでは、なぜ<manner>が不活性となると「程度」の解釈が得られるのだろうか。本論では、基体動詞の LCS 内の上位事象の<manner>が不活性の場合、「-方」はかわりに、結果状

態を表す下位事象[BE AT]に含まれる意味素性[+ scalable]を取り立てると主張する。(以下の LCS でイタリックはその部分が不活性であることを示す。)

(27) 壊れる

[x=y CONTROL <manner> [y BECOME [y BE AT
BROKEN [+ scalable]]]]

[+ scalable]は、例えば「高い」や「低い」など程度を表す尺度を持つ状態を意味する述語に付加される意味素性で、(27)においては「壊れている」という尺度をもつ状態を表す BROKEN にこの素性が与えられており、「壊れ方」という表現は、「-方」がこの素性を取り立てることにより「程度」の解釈が与えられている。

ここまでの議論で生じる疑問は、主に以下の(28)に挙げる2つである。

- (28) a. なぜ「-方」は上位事象を持った動詞を選択するのか。
b. なぜ、上位事象を修飾する<manner>が抑圧されると、かわりに下位事象の[+ scalable]がとりたてられ、程度の意味となるのか。

これらの疑問について深く考察し、答えを与えるために4節では「-方」表現の統語構造について議論する。

4. 「-方」表現の統語構造

本節では、「-方」表現の統語構造について検討する。具体的には、(29)に示すように「-方」はNPの主要部Nであり、それが $v^{(*)}P$ を補部に取り持つ構造を持つと考える。また、(29a)に示すように、 v^* が外項を持つ場合には、「方」がLCSのACTやCONTROLなどの上位事象に相当すると考えられる v^* と関連付けられて様態の解釈が生じる一方、(29b)に示すように、

非対格動詞や受け身のように v が外項を持たない場合には、それが不活性となるため「-方」は LCS の BE に相当すると考えられる V と関連付けられて程度の解釈が生じると主張する。

(29) a. $[_{NP} [_{v^*P} [_{VP} [v \text{ 走り}]] v^*] [_N \text{ 方}]]$ (様態)

b. $[_{NP} [_{vP} [_{VP} [v \text{ こわ}]] [v \text{ され}]] [_N \text{ 方}]]$ (程度)

まず「-方」が $v^{(*)}P$ を補部として選択するという根拠について簡単に議論する。伊藤・杉岡 (2002:108) で既に指摘されているが、「方」が付加する動詞は(30a)のように敬語表現を伴うことができる。敬語表現は機能範疇と関わる現象であると考えられるので、「-方」の補部には $v^{(*)}P$ が投射されていると言えよう(cf. Toribio (1990))。また、(30b)に示すように、「ている」のようなアスペクトを表す要素が「方」の直前(つまり、その補部)に現われることができないことから、 $v^{(*)}P$ より上の機能範疇(例えば「ている」が生成されると考えられる Asp(ect)P)は投射されていないことがわかる。

(30) a. 先生のお話になり方 (伊藤・杉岡 (2002:108))

b. *彼の走ってい方、*彼の座ってい方、*ケーキの作
ってい方

次に「-方」表現はなぜ外項がある場合には様態の意味を、外項がない場合には程度の意味を持つのかについて、統語構造の観点から議論する。以下の分析にとって重要となるのは、竹沢(1991)が考察の対象とした日本語の「ている」形とその解釈のメカニズムである。2節の最後で概観したように、動詞が「ている」を伴った場合、動作が継続していることを表す「進行の解釈」と、ある出来事の結果が残存することを表す「結果の解釈」があることが知られている。例を(31)として再録する。

- (31) a. 山田さんが走っている (進行)
 b. コップが壊れている (結果) (竹沢(1991))

この事実を竹沢(1991)は、(32)に示すメカニズムを用いて説明している。

- (32) 「ている」の結果相解釈は、主語と影響動詞の内在項(internal argument)の間に束縛関係がある場合に限られる。(竹沢(1991: 70))

たとえば、(33a)に例示する「電話する」のような非能格動詞の場合、主語の「山田さん」は外項であり、VPの外に基底生成されるため主語と動詞の内在項の位置に痕跡などを介した束縛関係は生じない。このことから、非能格動詞に「ている」が付加した場合には結果ではなく進行の解釈が生じることになる。これに対し、(33b)に示す非対格動詞「壊れる」の場合には、Vの内項の位置に基底生成された名詞句が派生のある段階で主語の位置に移動するために内項の位置には痕跡が残され、その痕跡は主語の位置に移動した名詞句によって束縛される。このことから、(33b)は(32)の条件を満たすことになり、この例は結果相の解釈を持つことになる。

- (33) a. 山田さんが [_{VP} 電話している]
 b. [_S [おもちゃ]_i] が [_{VP} *t_i* 壊れている]]



さらに竹沢は、主語が内在項を束縛している場合に結果相解釈が得られる理由について、(34)のように述べている。

- (34) ... そして主語が内在項を束縛している場合に結果相解釈が現われる理由は、束縛により連鎖が主語と内在項の間に形成され、 θ 基準によって外在 θ 役割として付与されるはずの「行為主体」が排除され、

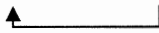
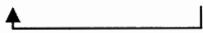
したがって「行為主体」のない「継続」は結果状態の継続、つまり結果相の解釈となるからである。

(竹沢(1991: 75 – 76))

本論では、竹沢(1991)の分析を援用し、(35)のように、「-方」表現の解釈についても(32)と同様のメカニズムが関与していることを提案する。

- (35) 「-方」表現において DP 指定部にある名詞句と、「-方」が選択する基体動詞の VP 内の要素との間に束縛関係が形成されるときに程度の解釈が生じる。

たとえば(36a)は非能格動詞の「走る」に「-方」が付加した例であるが、ここでは「走る」の主語に相当する「太郎」は v^*P の指定部に基底生成され、DP 指定部に移動する。ここで重要なことは、DP 指定部に移動した「太郎」は動詞の外項であるので、「-方」が選択する基体動詞の VP 内の要素との間に束縛関係は生じていないことである。したがって(36a)では程度の解釈ではなく様態の解釈が得られる。一方、(36b)は非対格動詞に「-方」が付加した例であるが、ここでは VP 内に基底生成された「おもちゃ」が DP 指定部に移動している。その結果、DP 指定部に移動した「おもちゃ」と VP 内に残された痕跡との間に束縛関係が生じている。このことと(35)の条件から、(36b)は程度の解釈を持つことになる。

- (36) a. $[_{DP} \text{ 太郎の } i [_{NP} [_{v^*P} t_i [_{VP} [v \text{ 走り}]] v^*] [_N \text{ 方}]] D]$ (様態)

 b. $[_{DP} \text{ おもちゃの } i [_{NP} [_{VP} [_{VP} t_i [v \text{ こわれ}]] v] [_N \text{ 方}]] D]$ (程度)


また、(37)に示すように、DP 指定部にある要素が VP の内項を束縛している場合に程度の解釈が得られる理由について

も(34)と同様に考えることができる。

- (37) 「-方」表現において DP 指定部にある要素が VP の内項を束縛している場合に程度の解釈が得られる理由は、前者と後者との間に束縛関係による連鎖が形成され、 θ 基準によって外在 θ 役割として付与されるはずの「行為主体」（つまり、LCS における ACT や CONTROL の主語）が排除され、その結果、LCS の下位事象 (BE) に相当する V の意味が取り立てられるためである。

次に格標示について簡単に触れておきたい。(38)に繰り返すように、「-方」の選択する基体動詞の目的語は「を」格でなく「の」格で実現されるが、これは「-方」が名詞化接辞であり、それが動詞に付加することで動詞が対格を付与できなくなるためであると考えられる。

- (38) 本 {の/*を} 読み方

このことは、受身形の形成過程において受動形態素（英語では -en）が名詞的性質を持ち、動詞の対格（素性）を吸収する（たとえば Jeaggli (1986)）のと並行的である。

最後に「方」が動詞の受身形を選択できるかどうかについて検討しておきたい。本稿の冒頭でも述べたように、動詞の受身形に「方」を付加することができる。例は(39)として繰り返す。

- (39) 愛され方 (= (1b))

(40)も同様であるが、(40)では抑圧されている動作主が「による」を伴い表出している。

(40) その解体業者によるビルの壊され方

cf. その解体業者に（よって）ビルが壊された。

(39)、(40)とのかかわりで重要なことは、動詞の受身形に「方」が付加できるのは、直接受身形に限られるという事実である。つまり、間接受身形のときには基体動詞に「方」を付加することができない（佐野まさき氏の指摘による）。この事実は(41)に示されている。

(41) *太郎の雨 {の／に／による} 降られ方

cf. 太郎は雨に降られた。

(39)(40)と(41)の対比について本稿は影山(2006)にしたがい、受動文の構造はそのタイプにより異なると仮定し、そのことが文法性の差に表れると考える。より具体的には、影山は日本語の受け身形を有生物が主語の「出来事受影受身」（いわゆる間接受身文に相当）、有生物を主語とする「行為受影受身」（いわゆる直接受け身文に相当）、典型的には無生物名詞を主語とし、（状態）変化動詞を基体とする「変化受身」の3種類に分類している。また、影山は出来事受影受身の主語（出来事の被害を被る主体）は TP の指定部に、行為受影受身の主語は vP の指定部に、そして変化受身の主語は Asp(ect)P の指定部に基底生成されると提案している。さらに影山は受動形態素「られ」は出来事受影受身では T に、行為受影受身では v に、変化受身では Asp に付加されるとしている。以上の影山の分析を図示したものが(42)である。²

² (42b)で e_i は足の所有者（私）を表し、解釈の便宜上、 e_i の直後に助詞の「の」が補われている。

(42) a. 出来事受影受身文

[_{TP} 私は [_{VP} 雨に 降ら] れた]

b. 行為受影受身文

[_{TP} [_{VP} 私_i は [_{VP} 隣の人に e_iの足を踏ま] れた]]

((42a, b): 影山 (2006: 189))

c. 変化受身文 (の基底構造)

[_{TP} [_{VP} (酔っ払いに) [_{AspP} きれいな花_i が [_{VP1} [_{VP2} e_i [_{V2} 踏み潰す]] V₁] [_{Asp} [+telic] られ]] v] [_T た]]

((42c): 影山 (2006:215)を改変)

影山が主張するように出来事受影受身（間接受影受身）の主語は TP の指定部に生成されると仮定すると、(41)が非文法的であるのは、「-方」表現が統語的に有生物主語の生成される位置を欠くことと関係付けられる。つまり、「方」表現はその内部に TP を持たないので、主語の「太郎」が生成される位置が存在せず、非文になると考えられる。これに対して(40)は受身形の主語が無生物の「ビル」であり、動詞が状態変化を描写するものであるので変化受身文に「方」が付加した例であると考えられる。そして、「による」を伴った「その解体業者」が「方」が補部として選択する vP の指定部に生成されているので文法的であると考えることができる。

5. 理論的帰結

本節では 4 節での議論を踏まえ、3 節の(28)で提示した 2 つの疑問について再考する。以下に(28)を(43)として再掲する。

(43) a. なぜ「-方」は上位事象を持った動詞を選択するのか。

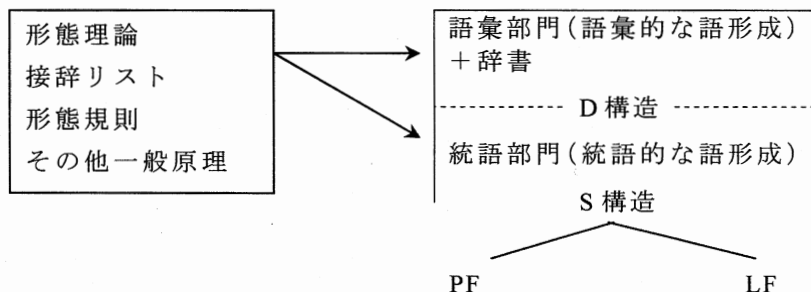
- b. なぜ、上位事象を修飾する<manner>が抑圧されると、かわりに下位事象の[+ scalable]がとりたてられ、程度の意味となるのか。

(43a, b)の疑問への答えは、それぞれ(44a, b)のようになる。

- (44) a. 「方」表現に尊敬語が表出できるという事実（伊藤・杉岡(2002)；(30a)参照）から、統語レベルにおいて「-方」の補部は $v^{(*)}P$ でなければならない、 $v^{(*)}P$ は LCS の上位事象（ACT や CONTROL）に相当するといえるので、「-方」は LCS において上位事象を持った動詞を選択する。
- b. 項構造レベルでの抑圧や、LCS レベルでの項の同定などにより、本来外項となる要素が抑圧されると、基体動詞の内項が DP の指定部に移動する。その結果、DP 指定部にある要素と VP の内項との間に束縛関係による連鎖が形成され、 θ 基準によって外在 θ 役割として付与されるはずの「行為主体」が排除される。このことにより、LCS の下位事象（BE）に相当する V の意味が取り立てられ、程度の解釈が得られる。

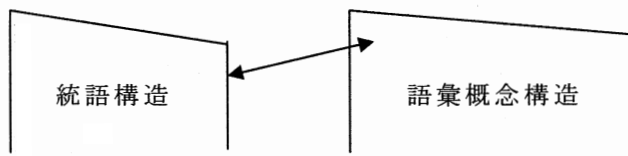
このように、LCS と項構造、そして統語構造を考えることで「-方」表現のふるまいに説明を与えることは、影山（1993）で提案されている「モジュール形態論」の枠組みを支持することになる。影山（1993）のモジュール形態論は、(45)に図示されるように接辞のリストや接辞の付加などの形態制約といった形態理論が独立したモジュールを成し、それが統語の各部門において適用されるということを前提としている。接辞「-方」の付加も LCS のような語彙意味表示レベル、項構造のレベル、統語論のレベルなど、複数の部門に適用されていることができるので、影山のモジュール形態論を支持すると考えられる。

(45) モジュール形態論のモデル (影山 (1993))



Chomsky (1995) のミニマリストプログラム以降、統語内での部門は廃止されているので、本論では、影山 (1993) で「部門」と呼ばれているものは、LCS や項構造といった異なった語彙情報表示レベルと置き換えて考える。つまり、形態規則が働く各「部門」は統語の派生レベル内にあるのではなく、LCS のような意味表示レベルや項構造、統語レベルにまたがって複数存在すると仮定する。なお、統語構造と LCS は、影山 (1996) に従い、(46) のように互いに独立して並行していると本論では考える。

(46) 統語構造と LCS の関係 (影山 (1996))



6. 結論

本論では、日本語の「-方」表現を語彙意味論の観点から検討し、「方」が選択する基体動詞の LCS には、上位事象が含まれていなければならないと主張した。また、LCS レベルにお

いて、「-方」が上位事象の<manner>を取り立てた場合、「様態」の解釈が得られ、<manner>が不活性になっている場合には、下位事象[BE AT]内の[+ scalable]が取り立てられて「程度」の解釈が表出すると議論した。さらに、統語論の観点からの分析を提示し、意味表示レベルや項構造、統語レベルといった複数のレベルにまたがって「-方」の形成を考えることが「モジュール形態論」を支持することを議論した。

Appendix : 動詞「ある」の特異性について


本文中の(8)に関する議論の中で、(47)の例を挙げ、動詞「ある」は「存在する」と同様に状態動詞であると考えられるのにも関わらず、「人間がどのように生きていくか」という「活動動詞」のような解釈を持つという事実を指摘したが、appendix ではこの事実について検討する。

(47) 人としての在り方


この事実を捉えるにあたり、本稿では動詞「ある」は以下のような特性を持つものと主張する。

- (48) a. 動詞「ある」は活動を表す上位事象と状態を描写する下位事象を併せ持つ。
- b. 「(事物が) 存在する」と解釈される場合には、上位事象は背景化され、その結果、下位事象が前景化される。

(48)の主張を LCS を用いて表したものが(49)である。(なお、下線はそれが付された事象が背景化されていることを示す。)

- (49) [event x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [state y BE AT z]]
- 

背景化



前景化

このような LCS 表示を支持する例として(50)が挙げられる。

(50) 絵が壁にある

絵が壁という場所に存在するためには、誰かがそこに絵を持ってきて掛けなければならないが、その行為を表す上位事象が背景化されているために(50)で動詞「ある」は状態を表すものとして解釈される。

これに対して(47)の例では、本来背景化されているはずの上位事象が「方」が付加することで前景化し、「ある」は「活動動詞」として解釈されると考えられる。³

参考文献

- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』、研究社、東京。
- Jaeggli, O. A. (1986) "Passive," *Linguistic Inquiry* 17, 587 – 622.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』、ひつじ書房、東京。
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』、くろしお出版、東京。
- 影山太郎 (2006) 「日本語受身文の統語構造—モジュール形態論からのアプローチ」、『レキシコンフォーラム』2、179 – 231.
- Pustejovsky, J. (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge, Mass.

³ ただし、主語の名詞によって動詞「ある」の解釈が左右される可能性もあるので、LCS よりも特質構造(Qualia Structure)や、そこでの操作(例えば共合成 (co-composition) ; 詳しくは Pustejovsky (1995)などを参照)をも考慮に入れる必要があるように思われる。詳細については今後の検討課題としたい。

竹沢幸一 (1991) 「受動文、能格文、分離不可能所有構文と「ている」の解釈」、仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』、くろしお出版、59-81。

Toribio, A. (1990) “Specifier-head Agreement in Japanese,” *WCCFL* 9, 535–548.

(長谷部)

162-8656

東京都新宿区戸山 3-20-1

学習院女子高等科

305-8577

つくば市天王台 1-1-1

筑波大学

ikukolcs@yahoo.co.jp

(神谷)

261-0014

千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

nkamiya@kanda.kuis.ac.jp